



卒業論文作成へ向けて

2015年 3月 配布

京都大学研究公正教育小委員会
担当委員 経営管理大学院教授
松井啓之

本資料の構成

- 科学研究活動とは
 - 心構え、研究計画、研究活動、研究成果
 - 研究不正とは: 特定不正行為 (FFP)、好ましくない研究行為 (QRP)
 - 研究不正を防ぐためには
- 論文とは
 - 論文のポイント、レポートとの違い、論文構成例
 - 適切な引用の仕方
- 京都大学における研究公正
 - 不正行為の事前防止のための取り組み
 - 組織の管理責任の明確化

卒業研究をはじめめるにあたって

- 卒業研究の結果をまとめた卒業論文は、大学生活の集大成であり、多くの学部生にとっては最初の科学研究活動の成果でもあります。大学院へ進学する人にとっては、これから始まる科学研究活動の入り口です。また卒業後、就職する人にとっては、卒業研究は、最初で最後の科学研究活動かもしれません。だからこそ、科学研究が出来る、この機会を大切にしてください。
- 京都大学では、「志の高い」研究を目指すという積極的視点から、これまでもレポート作成における剽窃の禁止など、大学で学ぶ上で必要とされるマナー教育を受講し、実践されてきたはずです。これらを踏まえ、本資料は、実りある卒業研究を行うために必要とされる、公正な科学研究 (Research Integrity) についてまとめたものです。

科学研究活動の心構え

- 科学研究は、私たちを取り巻くさまざまな事象に関して、その成り立ちや理由について心理をとらえ解明したいという、知的な好奇心や探究心からもたらされる活動です。科学研究は多くの先人たちの積み重ねによって発展してきました。科学の成果は私たちの社会生活に欠かせないものとなっており、特に近年では、科学が社会に及ぼす影響は極めて大きなものとなっています。このことは科学者にとって誇らしいことであると同時に、大きな責任と期待を担っていることを意味します。
- 一方、科学研究をめぐるっては、科学の持つ根源的な価値観である「真理の探求」をおろそかにするような事例が残念ながら発生しています。仮にこうした状況が続くようなことがあれば、科学への信頼は傷つき、科学の健全な発展が脅かされることになるでしょう。
- 責任ある科学者は、科学の健全な発展のために、こうした事態に自ら適切に対応していく必要があります。科学研究のあるべき姿や誠実な科学者として身につけておくべき心得についてあらためて認識するとともに、更新の指導においても十分留意することが大切です。
 - 『科学の健全な発展のために—誠実な科学者の心得—』日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会 まえがきより

科学研究活動とは(1)

- 科学者は、科学研究をすすめる上で、真摯に、公正な研究を行うことが求められており、それは科学者としての義務となります。
- 科学研究活動は、1)研究計画をたて、2)計画に基づく研究を進め、3)そして研究成果を発表する、という3つの段階から構成されます。各段階の概要と注意すべきことを、以下にまとめます。

1)研究計画をたてる

- 科学者が研究計画を立てることから、研究は始まります。何について興味を持ち、やりたい事柄や目的は何か、どのような考え方や方法をとるかなどの構想があり、その構想を研究計画として次第に育成していきます。
- 科学研究を進めるにあたり、研究計画では、研究の意義、研究の妥当性について検討が必要です。
- また、「人権の保護」及び「法令等の遵守(生命倫理、安全管理など)」、「利益相反」、「デュアルユース(ある研究が民生と軍事の両方に使える)」への対応等が、研究計画の段階から求められます。

科学研究活動とは(2)

2) 研究を進める

- 研究計画に基づき、科学研究を進める上で、特に「人」を対象とする研究の場合、科学者の責任が重要です。具体的には、被験者となることを求められた者が、研究者から十分な説明を受け、納得した上で参加することに同意する「インフォームド・コンセント」を得ているかどうか、さらに得られた個人情報をしっかり管理をする等です。これは、実験だけではなく、アンケートやインタビュー調査も対象となり、必要に応じ、「倫理審査」を受ける必要も生じます。
- 当然ながら、後述するような研究不正を行為を行わないと同時に、疑いをかけられないように注意をする必要があります。そのため、科学研究におけるデータの信頼性を保証するために、①データが適切な手法に基づいて取得されたこと、②データの取得に当たって意図的な不正や過失によるミスが存在しないこと、③取得後の保管が適切に行われてオリジナリティが保たれていること、が必要で、実験系では記録のための「ラボノート(研究ノート、実験ノート)」が必須となります。また、他の分野においてもデータの収集、管理、処理において不正なく適切な処理が必要なことは言うまでもありません。

科学研究活動とは(3)

3) 研究成果を発表する

- 科学者の研究成果の発表は次の研究に土台となるだけでなく、人類の知識を深め、文字となった論文や報告は世代を超えて継承される財産となります。さらに、先行研究業績の権利(著作権)を守り、尊重することは科学者として極めて重要となります。
- 研究成果は、責任ある研究が保持すべき、正直さ(honesty)、正確さ(accuracy)、効率性(efficiency)、客観性(objectivity)を満たす必要があります。①科学者は何をしたのか(方法:研究についての十分かつ公平な記述)、②科学者は何を見いだしたのか(結果:結果についての正確な報告)、③科学者はその結果から何を導こうとしているのか(考察:知見についての誠実かつ公平な評価)、の3点を明確に記述しているかを基準として評価されます。なお、この基準を満たすことは必ずしも容易ではありません。
- 科学者の研究への貢献を認めることを「クレジット(credit)」といい、論文の著者として表示されるオーサーシップ(authorship)や「引用」や「謝辞」もクレジットを与える方法です。クレジットは、科学者の評価として重要なものです。

科学研究活動とは(4)

- オーサーシップは、責任ある研究成果の発表が満たすべき基準をクリアしたことを保証し、義務を履行する責任を負います。そのことを踏まえ、オーサーシップの責任を踏まえ著者を記載する必要があります。例えば、著者としての資格がないにも関わらず、真の著者から好意的に付与される「ギフト・オーサーシップ」や著者として資格があるにも関わらず著者として記載されない「ゴースト・オーサーシップ」は許されません。
- 著者自身によって既に公表されていることを開示することなく、同一情報を投稿し、発表する「二重投稿・二重出版」、1つの研究を複数の小研究に分割して細切れに出版する「サラミ出版/ボローニア出版」、先行研究について適切な参照がなされていない、あるいは謝辞の明記が不十分、といった不適切な発表方法は認められません。
- 著作権は著作物を製作した際に自動的に付与される権利であり、先行研究業績には必ず著作権が存在します。論文や書籍中の文章・図・表・写真・イラスト、講演、新聞記事、雑誌記事などの著作物を二次利用する際には、「引用」といった正当な方法以外では、著作権者(著者、出版社等)の許可を得る必要があります。

研究活動における不正行為とは(1)

- 特定不正行為(FFP): 研究者および研究機関への措置(処罰)の対象
 - 捏造(Fabrication)
 - 存在しないデータ、研究成果を作成すること。
 - 改竄(Falsification)
 - 研究資料・機器・過程を変更する操作を行い、データ、研究活動によって得られた結果等を真正でないものに加工すること。
 - 盗用(Plagiarism)
 - 他の研究者のアイデア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を、当該研究者の了解又は適切な表示なく流用すること。

研究活動における不正行為とは(2)

- 好ましくない研究行為 (QRP : Questionable Research Practice)
 - 特定不正行為 (FFP) にあたらなくとも、誠実な研究との間で、研究への信頼性を侵すものとして懸念されている行為。具体的には、以下のもの。
 - 重要な研究データを、一定期間、保管しないこと
 - 研究記録の不適切な管理
 - 論文著者の記載における問題
 - 研究資料・研究データの提供拒絶
 - 不十分な研究指導、学生の搾取。研究成果の不確実な発表 (特にメディアに対して)

誠実な研究活動

好ましくない研究行為

研究不正

(理想的な行動)

(最悪の行動)

研究活動における不正行為とは(3)

- こんなことが研究上の不正行為です。
 - おもったとおりの結果が得られなかったため、架空の実験画像を作出し、公表した。
 - 推論に合わない実験データを恣意的に削除してグラフを作成し、公表した。
 - 論文として発表した研究に関する実験ノート等の研究の記録を残さなかった。
 - 研究室の同僚がミーティングで発表していたアイデアを、自らのアイデアとして公表した。
 - 論文を作成する際、序論や専攻研究の説明は重要ではないと考え、他者の論文からそのまま流用した。
 - インターネットで見つけた他人の文章を切り貼りして自分のレポートとして提出した。
 - 東京大学 科学研究行動規範委員会, 『科学研究行動規範リーフレット』, 2013年12月 (<http://www.u-tokyo.ac.jp/content/400006405.pdf>) より引用

研究活動における不正行為を防ぐために

- 捏造・改竄を防ぐために→データの収集・管理・処理
 - 生データや実験ノート等の研究の記録や実験試料等を一定期間保存し、適切に管理、開示することは、不正行為の抑止や、万一不正行為の疑いを受けた場合にその自己防衛に資することになります。
- 盗用を防ぐために→出典の明記、適切な引用
 - 論文の実質的要件を充たすために、まず先行研究業績を分析する必要があるため、当然、多数の文献を参照する必要があります。そして、他人の研究成果を利用するためには、出典先を明示し、読者が出典先に当たれるようにしなければなりません。そのために適切な引用が必要となります。
 - 他人の著作物を引用する必然性があること
 - かぎ括弧をつけるなど、自分の著作物と引用部分とが区別されていること
 - 自分の著作物と引用する著作物との主従関係が明確であること(自分の著作物が主体)
 - 出所の明示がなされていること

論文とは(1)

- 論文については、漠然とした定義がなされています。そこで、代表的な定義として以下の2つを紹介します。
- 「専門分野における妥当な問い(課題)に基づいて1つの明確な答えを主張し、その主張を論理的に裏づけるための事理的・理論的な根拠を呈示して説得・論証する文章」
 - 戸田山和久(2002),『論文の教室 -NHKブックス-』, 日本放送出版協会
- 「学問のある分野において、先人の研究成果である著者、論文などの先行研究業績を理論的・批判的に精査・分析した結果に基づき、何らかのユニークな視点から説得力のある自己の独創的意見を新しい知見として論理的に展開し、もって学問のさらなる発展に寄与する文章群」
 - 新堀聡,『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』, 同文館出版, 2002

論文とは(2)

□ 論文が持つべき3つの重要なポイント

- 同じテーマについての先人の研究の成果(これを先行研究業績と呼ぶ)の精査・分析を行うこと。
- 精査・分析の結果、先行研究業績の問題点、疑問点などを発見し、自らの独創的意見を新しい知見として説得力を持って理論的に定時すること。これは、論文が独創的(originality)を持っていないと意味する。
- 先行研究業績に追加される独創的な自説(新しい知見)によって、学問の当該分野の発展に寄与し、後続の研究者のために新しく「先行研究業績」としての役割を果たすこと。

□ 卒業論文における独創的意見の占める割合

- 現状では、大学の学部の卒業論文に独創的な意見の論述を要求することは、かなり無理がある。しかし、先行研究業績を読み、分析した後に、博士・修士論文と比較して未熟なものであっても、終章で自己の意見を述べるのが、最小限度要求されよう
- 新堀聡、『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』, 同文館出版, 2002

論文とレポートの違いについて

- レポート： 読者は原則として、担当教員
 - 指定されたテーマに関して、理解度をアピール
 - 自分なりの主張、観点や疑問などを提示した報告書
- 論文： 学会や社会に対して情報提示・共有
 - 当該研究課題について、先行研究のレビューをふまえ、提案の研究アプローチに基づいて、オリジナルな結論を提示し、学問および社会に対して貢献
 - 独創的な意見が必要
- 課題設定 (What) と解決アプローチ (How) とを区別
 - 論文の場合、品質の80%の要素は、課題設定で決まる (といっても過言ではない) !
 - Howにとらわれすぎない

平易な文章、明快な論理

□ 簡潔明瞭性 ※難しいものではない

- 推量表現、主観的表現は避ける, 客観記述と主観記述とを区別する
- なくても意味が通る文章は割愛する
- 概念、用語などの使用法を明確化する
- 論旨の過度な反転は避ける（しかし、…、しかし、…、しかし、…）
- 過度の枝分かれは避ける（上流も下流も）
- 読者の視点にたった理解しやすい構造表現

□ 論理的思考

- 演繹、帰納、仮説検証、因果、関係による導出
- 三段論法、背理法、…
- 例示と抽象化（一般化）
- オーバージェネラリゼーションに注意

論文構成例

- ◆ 表紙（タイトル、著者、所属、日付等）
- ◆ 目次（必要に応じ）
- ◆ 要約（Executive Summary）
- ◆ 本文

1. はじめに

- 背景
- 課題認識
- 解決アプローチ

2. 従来の研究活動状況

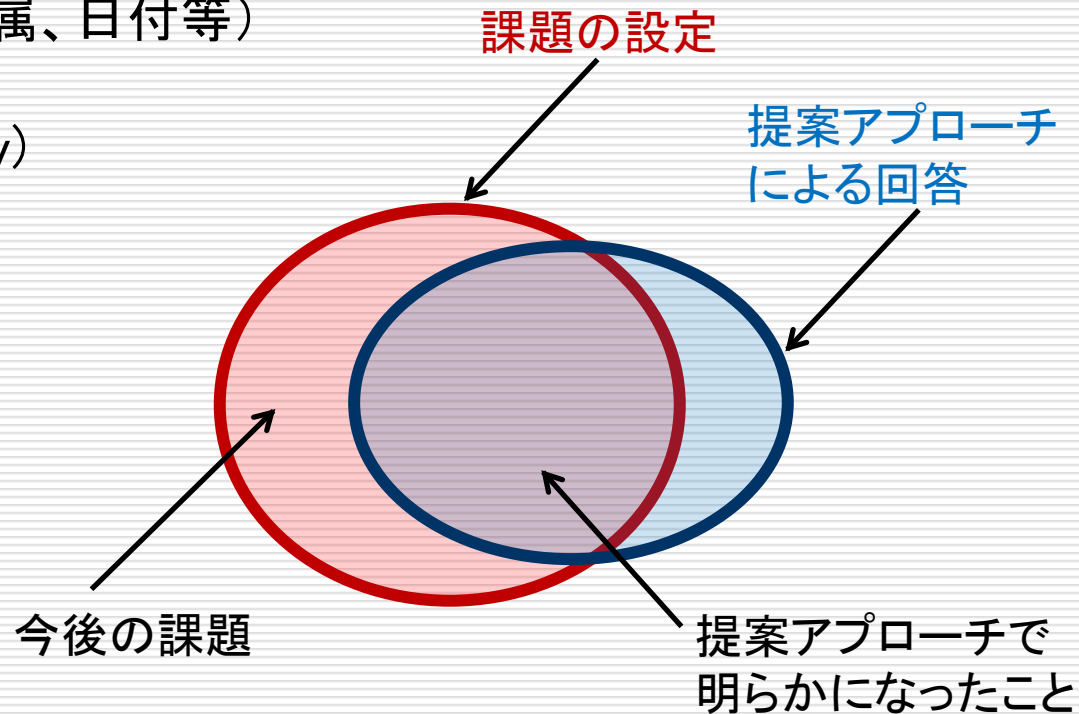
- 従来活動の整理
- ポジショニング

3. 提案アプローチ

- アプローチの明示
- 仮説提示、新しい方法論提案、新しい整理の視点導出等
提案アプローチの内容詳細

4. 調査・分析・シミュレーション

- 提案アプローチに基づく検証、調査・分析、シミュレーションなど
- 知見
- 分析結果のまとめ



論文構成例（続き）

5. まとめ

- 本論文で明らかになったこと
- 今後の課題(展望)

- ◆ 謝辞
- ◆ 参考文献
- ◆ 付録

研究論文のチェックポイント

- オリジナリティ(独創性) -- originality
- 有益性・有意味性 -- significance
- 研究領域との関連度 -- relevance
- 論理的展開 -- accurate logic
- 文章のよみやすさ -- readability

適切な引用(1)

□ 狭義の引用: quote, quotation

- 人文科学など、論文・書籍等の内容の一部を文脈・セマンティクスの正確さを重視して参照するためには「一字一句違わずに」再掲することが必要です。文字通りquote、括弧等で直接話法的に言及し、これが本来の「引用」です。従って、英文論文等を引用する場合の引用ヶ所はその原文のまま書く必要があります。quotationでは引用される文献の目録を「引用文献」と標記し、引用ヶ所ページも明記することが通例です。

■ quotationが意義を持つ例

- 川端は文献[1]において「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」と記している。

引用文献 [1] 川端康成: “雪国”, 創元社 (1948)

- 川端は文献[1]において雪国との国境にはトンネルがあるとしている。

参考文献 [1] 川端康成: “雪国”, 創元社 (1948)

適切な引用(2)

□ 広義の引用: cite, citation

- 特に自然科学系では文脈・セマンティクスの正確さは無用であり、そこにある論理的事実が重要となります。従って、一字一句違わずにそのまま書く必要性はありません。このため、しばしば引用というよりは参照といわれます。citationでは引用される文献の目録を「参考文献」と標記することが通例です。

■ citationが意義を持つ例

- Rosenfeld らは文献[1]において画像を “Informally, a picture is a flat object whose brightness or color may vary from point to point.” と説明している。

引用文献 [1] A. Rosenfeld and A. C. Kak: “Digital Picture Processing”, p. 2, Academic Press (1976)

- Rosenfeld らは画像を位置ごとに明るさや色に変化する平面^[1]、と説明している。

参考文献 [1] A. Rosenfeld and A. C. Kak: “Digital Picture Processing”, Academic Press (1976)

適切な引用(3)

□ 引用に関する具体的な注意

- 基本的に、他人の著書・論文の文章をそのまま引用することは避け、同じ考え方であっても、自分の言葉で言い換えるか(paraphrase)、または、要約する(summarize)こととします(=citation)。
- やむを得ず、他人の文章をそのまま引用する場合(=quotation)には、和文の場合は「 」、英文の場合は”…” でくることで、引用であることを明示します。また、長文の引用の場合には、タブで1字ないし2字程度下げるなどのインデントを用いた表記を行い、引用文であることを明示します。
なお、引用する文章の長さは、必要最小限度の短さにすること。
- Citationでもquotationであっても、必ず引用あるいは参照が必要。
- 文章の引用だけでなく、図表を引用する場合にも同様の手続きをとること。
- 資料の「孫引き(ある者が書いた文章を引用したものをさらに別の者が引用すること)」を避け、できるかぎり「原典」にあたる必要がある。どうしても「原典」に当たれないときは「孫引き」であることを明記。

適切な引用(4)

□ 参考文献/引用文献

- 厳密には直接本文に引用した「引用文献」と、直接引用してはいないが、レポートを書く際に参考にした「参考文献」があります。広義には引用文献を含め「参考文献」とする場合があります。また、引用文献は、後述する「注」に入れる場合もあります。
 - 論文の場合：著者名，出版年，論文題名，論文が掲載されている雑誌名，雑誌の巻数・号数，論文集の編者名と出版社名，掲載ページ
 - 書籍の場合：著者名，出版年，本の題名，出版社名
 - 詳細は個々の論文の規定に従うこと。例えば、出版年は最後につける場合もある。また文献に番号を付けて、番号で参照することもある。

□ 注

- 例を示したり、さらに内容を詳しく説明したりするなど、そのことがらについて読む人がさらに知りたい場合に役立つ内容、あるいは触れておく価値はあるが、本文の内容に直接関係ないものや、本文中に書くと、流れを悪くしてしまう内容を別に記す方法。
 - 同じページの欄外に書く「脚注」、本文と参考文献の間に書く「末尾注」がある。また、一般に理系の論文では注を使わないことが多い。

適切な引用(5)

出典の表記については、主に以下の2通りの方法があります。

1.引用等の文献については注をつけて、脚注あるいは文章末注として、注に出典を表記する。

マーケティングとは「単なる販売と区別される、販売前活動、販売後活動を含む一連の統合的にマネジメントされた市場への働きかけ」⁵あると述べている。

注5 若林靖永『顧客志向のマス・マーケティング』同文館、2003年、25-26ページ。

2.文章末に引用文献、参考文献を一括してアルファベット順あるいは50音順に配列して、本文の中で引用文献の刊行年、引用ページを[]内に明示する。

若林[2003]が述べているように、市場細分化もマス・マーケティングの基盤の上で展開されており、その発展形態である(33-34頁)であることを理解しなければならない。

参 考 文 献 一 覧
若林靖永[2003]『顧客志向のマス・マーケティング』同文館出版。

適切な引用(6)

- 文献表記についてもさまざまな表記法がありますが、①著者に関する書誌要素、②標題に関する書誌要素、③出版・物理的特徴に関する書誌要素、④注記的な書誌要素、が含まれている必要があり、原則として①から④の順に記述します。
- 以下に、参考文献の書き方の事例を示します。なお、学部毎に卒業論文の書き方等で文献表記のルールが決められている場合には、それぞれのルールにしたがってください。
- 単行書：著者名，書名，巻数，版数，出版社，出版年，総ページ数
 - 坂村健，『グローバルスタンダードと国家戦略』，NTT出版，2005，272p.
 - Frenkel, D.; Smit, B., *Understanding Molecular Simulation: From Algorithms to Applications*, 2nd ed., Academic Press, 2002, 664p.
 - Drucker, P.F., *The Practice of Management*, 1954.(現代経営研究会訳『現代の経営』(上・下)，ダイヤモンド社，1965年，).

適切な引用(7)

- 論文: 著者名, 論文名, 雑誌名, 巻号, 刊行年月, ページ.
 - Lee, Jeffrey E.; Fusco, Marnie L.; Hessel, Ann J. et al. Structure of the Ebola virus glycoprotein bound to an antibody from a human survivor. Nature. 2008, vol. 454, no. 7201, p. 177-182.
 - 若林靖永, マーケティングの定義の再検討, 同志社商学, 第61巻, 第6号, 2010年3月, pp. 115-133.
- ウェブサイト上の記事: 著者名, ウェブページの題名, ウェブサイトの名称, (可能であれば)更新日付, 入手先, (入手日付).
 - 中央教育審議会, 教育振興基本計画についてー「教育立国」の実現に向けてー(答申), 文部科学省, 2008-04-18, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/08042205.htm, (参照 2008-08-13).
- 科学技術情報流通技術基準(SIST)では、14の基準が策定されており、Webページ(<http://sist-jst.jp/>)上で公開されています。「SIST 02: 2007.参考文献の書き方」では、具体的な記述例が豊富に紹介されています。

京都大学における研究公正(1)

- 京都大学は「研究の自由と自主を基礎に、高い倫理性を備えた研究活動により、世界的に卓越した知の創造を行う」ことを研究面での基本理念としてきました。文部科学省は、『研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン』(平成26年8月26日, 文部科学大臣決定)の制定に対応して「京都大学における公正な研究活動の推進等に関する規程(平成27年3月1日改正)」に従い、以下の取り組みを行っています。

- 不正行為の事前防止のための取り組み

- 研究倫理教育責任者の配置、学生・教職員への研究倫理教育の実施、一定期間の研究データの保存・開示

- 組織の管理責任の明確化

- 不正行為の疑惑が生じたときの調査手続き、方法等に関する規定の整備、不正行為の調査結果の文部科学省への報告の義務化・広報、適切な研究愛性を確保するための環境整備・取り組み

京都大学における研究公正(2)

- 学生の皆さんも、研究不正を万一見かけた場合、あるいは指導教員や先輩から研究不正を強要された場合、これらの規定に従い、研究推進部※研究推進課もしくは各部局の通報窓口にご相談ください。※2015.3まで研究国際部
 - http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/ethic/research_guide/madoguchi
- 京都大学における公正な研究活動の推進等に関する規程
 - <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/organization/other/revision/documents/h26/t59-26-2.pdf>
- 研究者による研究論文の捏造・改ざん・盗用、いわゆる研究不正の防止については、**個々の研究者の自覚**が求められています。
- 不正がおこらないような「仕組みづくり」も必要です。その仕組み作りを有意義なものとするには、単に不正を防止するという消極的な視点にとどまらず**「志の高い」研究を目指すという積極的な視点が肝要**です。
 - http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/events_news/office/kenkyukokusai/events/2014/140714_1.html

さいごに

研究公正・倫理は、研究の過程全体：研究立案、計画、実施、公表の全てに関わります。

常に「自分の問題」として、研究公正・倫理を意識してください。そして、よりよい卒業論文を作成してください。

京都大学の研究者として、
「志の高い」研究を！

「志の高い」研究
の仕組み作り



引用・参考文献(1)

- 文部科学省, 『研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン』, 2014.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/1351568.htm, (参照2015-3-22).
- 日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会, 『科学の健全な発展のために—誠実な科学者の心得—(暫定版)』, 2014.
http://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/fusei/1353972.htm, (参照2015-3-22).
- 京都大学における公正な研究活動の推進等に関する規程.
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/organization/other/revision/documents/h26/t59-26-2.pdf>. 2015/3/22アクセス
- 米国科学アカデミー編, 池内了訳, 『科学者をめざす君たちへ—研究者の責任ある行動とは 第3版』, 化学同人, 2010.
- 山崎茂明, 『科学者の発表倫理: 不正のない論文発表を考える』, 丸善出版, 2013.
- 宮崎喜久子, 中山健夫, 「京都大学大学院共通研究公正と倫理」, 2015.
- 池田光穂, 研究倫理入門.
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/101214R_Ethics.html, (参照2015/3/22).
- 東京大学 科学研究行動規範委員会, 「科学研究行動規範リーフレット」, 2013.
<http://www.u-tokyo.ac.jp/content/400006405.pdf>, (参照2015-3-22).

引用・参考文献(2)

- 戸田山和久,『論文の教室 レポートから卒論まで』, NHKブックス, 2002.
- 木下是雄,『理科系の作文技術』, 中央公論新社(中公新書), 1981.
- 新堀聡,『評価される博士・修士卒業論文の書き方・考え方』, 同文館出版, 2002.
- 佐藤望, 他,『アカデミック・スキルズ』, 慶應義塾大学出版会, 2006.
- 小笠原喜康,『大学生のためのレポート・論文術』, 講談社現代新書, 2002.
- 河野哲也,『レポート・論文の書き方入門 第3版』, 慶應義塾大学出版会, 2008.
- 小磯明,『「論文を書く」ということ—憂鬱な知的作業のすすめ』, 御茶の水書房, 2014.
- 原良憲,「京都大学経営管理大学院オリエンテーション2014 レポートの作成について」, 2014.
- 逆瀬川浩孝, レポートの書き方(一般論).
<http://www.f.waseda.jp/sakas/home.html/report.html>, (参照2015-3-22).
- 岡知史, 論文の書き方の基礎概念(上智大学文学部社会福祉学科_岡知史),
<http://pweb.sophia.ac.jp/oka/edu/writing/index.html>, (参照2015-3-22).
- 科学技術振興機構,『参考文献の役割と書き方 科学技術情報流通技術基準(SIST)の活用』, 2011.
http://sti.jst.go.jp/sist/pdf/SIST_booklet2011.pdf, (参照2015/3/22).